

## 城の石垣

泉鏡花作

### 全一章

同じことを、東京では世界一、地方では日本一と誇る。相州小田原の町に電車鐵道待合の、茶店の亭主が言に因れば、土地の鹽辛、蒲鉾、外郎、及び萬年町の竹山の藤、金格子の東海樓、料理店の天利、城の石垣、及び外廓の梅林は、凡そ日本一也。

莞爾として聞きながら、よし／＼其もよし、蒲鉾は旅店の口取でお知己、烏賊の鹽辛は節季をかけて漬物屋のびらで知る通、外郎は小本、物語で懇意なるべし。竹屋の藤は時節にあらず、金格子の東海樓は通つた道の青樓さの、處で今日の腹工合と、懷中の都合に因つて、天利といふので午餉にしよう、先づ其の城を見て梅とやれ、蒼は未だ固くツてもお天氣は此の通り、又此の小田原と来た日には、暖いこと日本一だ、喃、御亭主。然やうでござります。喜多八、さあ、其の氣で歩ばつしと、今こそ着流で駒

下駄なれ、以前は、つかさやをかけたお太刀一本一  
寸極め、振分の荷物、割合羽、函嶺の夜路をした、  
内神田の叔父的、名を彌次郎兵衛といふ小田原通、  
アイお茶代を置いたよ、とツイと出るのに旅は早立  
とあつて午前六時に揺起された眠い目でついて行く。

驛路の馬の鈴の音、しゃんと来る道筋ながら、時  
世といひ、大晦日、道中寂りとして、南側に廂を並  
ぶる商賈の家、薪を揃へて根占にしたる、門松を早  
や建て連ねて、歳の神を送るといふ、お祭の太鼓ど  
ん／＼／＼。ちゆうびやら／＼と角兵衛獅子、暢氣  
に懐手で町内を囃して通る。

此の町出外れに、森見えてお城の大手。  
しばし休む。

此處へ筒袖の片手ゆつたりと懐に、左手に山牛蒡  
を提げて、頬被したる六十ばかりの親仁、ぶらりと  
來懸るに路を問ふことよろしくあり。お節にや拵ら  
ふるに、このあたり門を流るゝ小川に浸して、老若  
男女打交り、手に手に之を洗ふを見た。後に小田原  
の町を放れ、函嶺の湯本近に一軒、茶店の娘、窶れ

姿すがたのいと美うつくしきが、路傍みちばたの筧かけひ、前まへなる山凡やまおよそ三四百  
間けん遠とほき處ところに千歳ちとせ久ひさしき靈水かたちみづを引ひいたりといふ、清きよら  
かなる樋ひの口くちに冷つめたき其その土つちを洗あらふを見て、山やまの芋いも  
は鰻うなぎになる、此この牛蒡ごぼう恠かくて石清水いはしみづに身みを灌そくがば、  
あはれ白魚しろいしなに化くわしやせんと、そゞろ胸むねに手てを置おきし  
が。

扨さて路みちを教をしへて後のち、件くだんの親仁おやしつく／＼と二人ふたりを見み  
送くる。いづれ美人びじんには縁えんなき衆生しゆじやう、其それも嬉うれしく、外そとく  
廓わくを右みぎに、やがて小ちひさき鳥居とりゐを潜もくれば、二にの丸まるの石いし  
垣がき、急きふに高たかく、目めの下した忽たちまち濠ほり深ふかく、水みづはや／＼涸かれた  
りいへどと雖いへども、枯蘆かれあしかや萱たぐひの類ほそみち、細路ほそみちをかけて、霜しもを鎧よろひ、  
ざゞくと立たつ。思おもはず行ゆき惱なやみ立たつて仰あふげば、虚こくう空くう  
に雲くものかゝれるばかり、參差しんしたる樹この間ま々々、風かぜさ  
へ渡わたる松まつの梢しすゑに、組連くみつらねたるお城しろの壁かべの苔こけ蒸むす石いしの  
一ひとつ々々、勇將ゆうしやう猛士まうし幾千いくの髭ひげある面おもてを列つらねし如ごとき、  
さても石垣いしがきの倅おもかけかな。

それより無言むごんにて半町はんちやうばかり、たら／＼と坂さかを上のぼ  
る。こゝに晝ひるも暗くらき樹立こだちの中に、ソと人ひとの氣勢けはひする  
を垣間かいま見みれば、石いしの鳥居とりゐに階子はしこかけて、輪飾わかざり掛かくる

少き一人、落葉搔く翁二人あり。宮は、報徳神社と  
いふ、彼の二二宮尊徳翁を祭れるもの、石段の南北  
に畏くも、宮様御手植の對の榊、四邊に塵も留めず、  
高きあたり靜に鳥の聲鳴きはす。此の社に詣で、  
云々。これより一説ある處、何の大晦日を逃げた癖  
に、尊徳様もないものだ、編輯の同人手を拍つて  
大に嘲けるに、たじ／＼となり、敢て我胸中に蓄へ  
たる富國經濟の道を説かず、纔に城の佛を記すのみ。

【完】